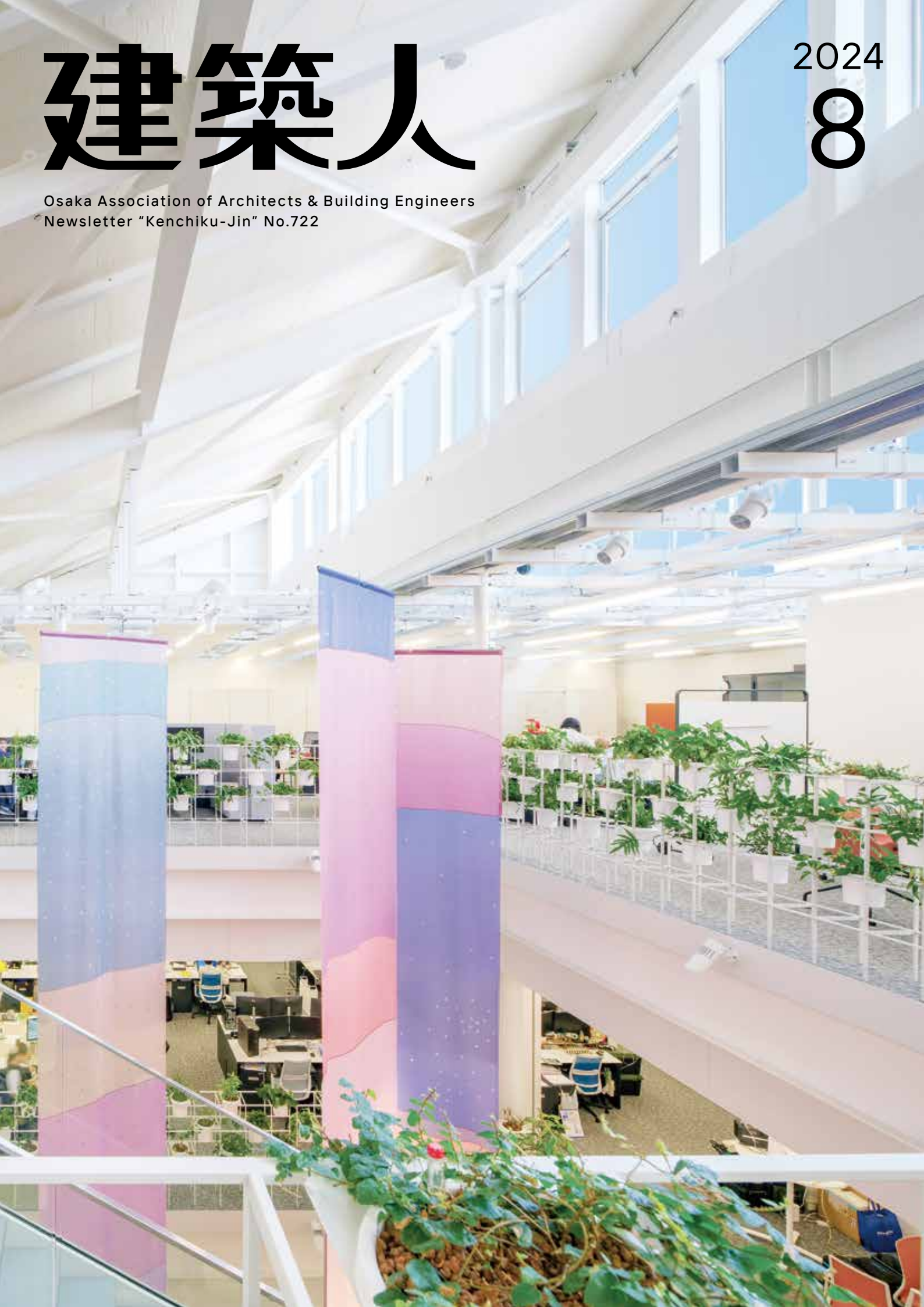


# 建築人

2024  
8

Osaka Association of Architects & Building Engineers  
Newsletter "Kenchiku-Jin" No.722





# 建築人

2024.08 No.722

Osaka Association of Architects & Building Engineers  
Newsletter "Kenchiku-Jin"

表紙の建築 「IIS/IHK堺新事務所」2023年

第67回 大阪建築コンクール 大阪府知事賞 受賞作品

設計：竹中工務店

施工：竹中工務店

撮影：小川重雄

敷地内に点在する事務所・食堂・応接機能を集約。全社員の交流を促すオフィス計画である。北向きの安定した自然光を取り込むハイスайдライト、4つの吹抜けを中心としたゆとりあるワンルーム空間、輻射パネルによる心地良い空気環境など「明るく・広く・快適な」ABWオフィスを創出した。

2 大阪浪漫

4 Gallery 建築作品紹介

「神戸薬科大学A棟」

設計：竹中工務店

施工：竹中工務店

「SARAVAH西天満店」

設計：T-Square Design Associates

施工：市川工務店

「番町の家」

設計：木原千利設計工房

施工：藤木工務店 四国支店

8 動静レポート

9 Topics

10 Information

12 News of Note

14 建築びとに訊く

18 記憶の建築

「横浜市中区役所」1983年

前川國男が遺した最後の庁舎建築の今 / 松隈 洋

建築人 No.722 2024年8月号

監修 公益社団法人大阪府建築士会 建築情報委員会

編集 建築情報委員会『建築人』編集部

部門長：田鍋 稔

委員長：松下典央（編集人代表）

編集人：武藤優哉 石上芳弘 荻窪伸彦 河崎太平

昇 勇 橋本頼幸 春岡須磨子

三谷勝章 村上栄司 山本恭史

事務局：隅原正太 母倉政美

ロゴ・フォーマットデザイン 芝野健太

印刷 中和印刷紙器株式会社

令和6年8月1日発行

発行人：会長／岡本森廣

発行所：公益社団法人大阪府建築士会

〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17 高田屋大手前ビル5F

tel. 06-6947-1961

## 大阪浪漫

（1985年10月・曽根崎小学校）

写真・文 喜多 章

大阪駅南東部に位置する曽根崎小学校が現役で存在している事を知り、新御堂筋の東側に在ったビルの上から撮影を試みた・・運良くその日は運動会の真っ最中、今から40年位前だから会期中の少年少女達は今や50歳前後だろう、アッという間に時は流れて行く・・



六甲山の麓、尾根の先端に広がる大学校舎再編計画。斜面地のレベル差に沿い、キャンパスに新しい学生の流れを生み出すハブ空間と、周辺の豊かな環境とつながる多様な居場所を創出した。

既存キャンパスのボトルネックを解消する2層分のエスカレーターが学生を3階メインホールへと導く。メインホールは、今後キャンパス中央に設える広場や眼下へ広がる街に開くと共に、中央吹き抜け周りに教室を配することで、学生の日常動線であり、授業の合間に一息つける“とまり木”的な居場所とした。また、従来の集中型の図書館システムを解体・分散配置し、ライブラリの一部とすることで、本に触れる機会と偶発的な学び・興味との出会いを促している。（興津俊宏）

所在地：兵庫県神戸市  
用途：大学  
竣工：2023.11  
構造規模：RC造+鉄骨造  
地上7階  
敷地面積：35,281㎡  
建築面積：2,420.15㎡  
延床面積：8,950.26㎡  
写真：酒井文明



大阪市北区西天満にあるバー。お店の最大の特徴は長さ9mのアフリカ産の1枚板のカウンターだが、この西天満店は角地の路面店ということで、両道路からのお店の見え方、また店内に入った時のカウンターの見え方にかなり拘った為、どこから見ても、そのカウンターの長さを確認する事が出来る。そしてバーの象徴とも言えるバックカウンターの壁面には、お店の名前「SARAVAH」がポルトガル語で祝福といった意味があり、その語源がアフリカであるということからヒントを得て、淡路島の土を使い、敢えて表面を割れさせ、乾いたアフリカの大地をイメージした左官仕上げとし、カウンター材とのバランスを図っている。

所在地：大阪市西天満  
用途：店舗  
竣工：2023.11  
延床面積：60.32㎡  
写真：楠瀬友将



夫婦と子供1人が茶の湯を楽しむ8畳の座敷と収蔵庫の有る住まいを計画した。敷地は間口に対して奥深く隣家が接近し南道路側のマンションから見下ろされるなどプライバシー確保の必要な立地であった。生活の中心になる居間食堂を廻りに気にすることなく庭に開放させるため、道路側に車庫、玄関、アプローチ、和室を配置し、大屋根で視線を遮り街路から一步奥まった静かで安心できる中庭を確保し、居間食堂を庭に開放させた。各部屋にもそれぞれの使い勝手に合わせた中庭を持たせている。

道路に面した大屋根は瓦葺きとして和室の有るこの住宅の顔とした。瓦の風情が道路を行きかう人に潤いを与えてくれる事も願った。

所在地：香川県高松市  
用途：専用住宅  
竣工：2021.06  
構造規模：木造2階  
敷地面積：430.35㎡  
延床面積：296.55㎡  
写真：松村芳治

※写真 上：客間から庭を見る  
右上：居間食堂  
左上：前面道路より外観  
左下：居間から庭を見る

# 2024年 「建築人賞」作品募集



審査委員長 磯 達雄

1963年 埼玉県生まれ  
1988年 名古屋大学工学部建築学科卒業  
日経BP社入社「日経アーキテクチュア」編集部勤務(～1999年)  
2001年～ 桑沢デザイン研究所非常勤講師  
2002年 フリックスタジオ共同主宰(～2020年)  
2008年～ 武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科非常勤講師  
2020年～ Office Bunga共同主宰  
2023年～ 早稲田大学芸術学校非常勤講師

## 「建築人Gallery」掲載作品は 『建築人賞』の候補作品です。

公益社団法人大阪府建築士会は、会員サービスの一環として会報誌「建築人」を毎月発行しています。本会会員をはじめ官公庁、大学、図書館、出版社、報道機関等に頒布し、発行部数は約3,000部です。「建築人」の誌上で「Gallery」の建築作品紹介コーナーを設け、現代建築の様相を反映できるものとして好評を博しており、毎年1月号～12月号のGalleryに掲載された作品が「建築人賞」の審査対象になります。

「建築人賞」は2009年に創設され、個人の審査委員長により選考し、表彰式は翌年5月の本会の定時総会で執り行われます。「建築人賞」「同賞新人賞」「同賞奨励賞」「同賞佳作」があり、「建築人賞」「同賞新人賞」の設計者には記念品が授与され、各賞の建築主、設計者、施工者にはそれぞれ賞状が贈られます。ぜひ本誌に皆様の建築作品の掲載をお願いいたします。



建築人賞



建築人賞新人賞



佐久間 靖 (ガラスアーティスト)

1971年 大阪府高槻市生まれ  
1996年 神戸学院大学 法学部 卒業  
1997年 ㈱ロクレールプロダクションガラスアーティスト 三浦啓子氏に師事  
2016年 ㈱Jiku Art Creation 作品制作に従事

## 「建築人」Gallery 掲載要項

### ■ 掲載概要

1頁カラー、写真4点程度、説明文300字程度

### ■ 掲載事項

- ・建築主、設計者、施工者、協力会社
- ・所在地、用途、竣工年、構造規模、敷地面積、建築面積、延床面積

### ■ 掲載料

110,000円(本体100,000円+消費税)

※1 初回割引 88,000円(本体80,000円+消費税)

(過去10年間で設計者及び施工者がGalleryに掲載されていない場合が対象です)

※2 若手初回割引 55,000円(本体50,000円+消費税)

(※1を満たす方のうち、40歳以下かつ建築設計事務所を主宰されている方が対象です)

### ■ 問合せ・申込み

公益社団法人大阪府建築士会事務局 担当:母倉

e-mail: info@aba-osakafu.or.jp TEL: 06-6947-1961 FAX: 06-6943-7103

# 動静レポート

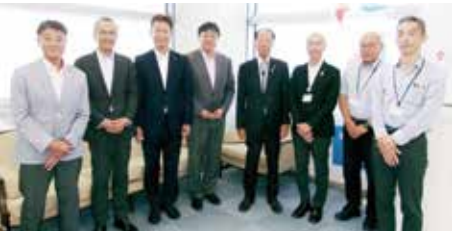
## 会長動静

- 6/26 近畿会長会議、近畿建築士会協議会
- 6/27 大阪府安全なまちづくり推進会議
- 6/28 近畿建築確認検査協会法人設立会
- 7/ 2 大阪府歴史的建造物委員会
- 7/ 6 近畿まちづくりリーダー会議
- 7/ 8 大阪府住宅建築局長面談  
大阪市計画調整局長面談
- 7/ 9 建築士登録機関等協議会理事会  
日本建築士会連合会正副会長会議
- 7/17 理事会
- 7/19 高槻市長面談  
茨木市長面談及び協定締結式
- 7/22 部門長面談
- 7/24 大阪府収用委員会
- 7/25 建築4団体会長・支部長会議

## 会長・役員による大阪府及び市町村訪問

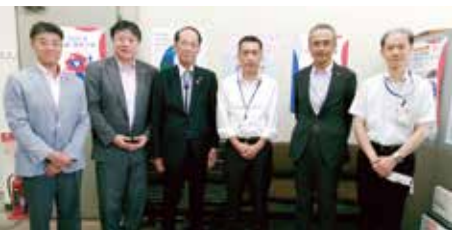
本会では、2013年（平成25年）の公益社団法人への移行以来、毎年恒例で府内43市町村の首長様との面談を行い、行政関連委員会等に会員建築士の派遣協力をはじめ、防災・建築相談・まちづくり・住環境等の活動実績をお伝えし、建築行政の支援に係る懇談を重ねております。

### ◎ 7/8 大阪府・財部祐介住宅建築局長と面談



左より/牧田専務理事、横田副会長、上田副会長、徳岡副会長、岡本会長、財部局長、小泉副理事、遠藤居住企画課長

### ◎ 7/8 大阪市・山田裕文計画調整局長と面談



左より/牧田専務理事、徳岡副会長、岡本会長、山田局長、横田副会長、坂中建築指導部長

### ◎ 7/19 高槻市・濱田剛史市長と面談



左より/荻窪理事、牧田専務理事、岡本会長、濱田市長、横田副会長

### ◎ 7/19 茨木市・福岡洋一市長と面談及び茨木市と本会の協定締結



左より/神保監事、横田副会長、福岡市長、岡本会長、牧田専務理事、田中理事

### 茨木市と応急危険度判定及び分譲マンションに関する協定を締結

7月19日付けで茨木市と本会は、発災時に茨木市内の約20ヵ所の避難所の応急危険度判定を本会の判定士が行う「避難所の応急危険度判定に関する協定」並びに分譲マンションの適正管理や耐震化、建替え等の相談や勉強会の開催に協力する「分譲マンションの適正管理等に関する協定」を締結いたしました。

## 7月度 理事会報告

日時 7月17日（水）16：00～18：00  
場所 本会東会議室  
出席 理事 40/47名 監事 2/2名

### (1) 入退会の承認

| (人)  | 6月    | 入会 | 退会 |
|------|-------|----|----|
| 正会員  | 2,185 | 4  | 15 |
| 準会員  | 28    | 0  | 0  |
| 特準会員 | 21    | 0  | 0  |
| 賛助会員 | 142   | 1  | 2  |
| 計    | 2,376 | 5  | 17 |

### (2) 会計報告

| (円) | 6月計        | 累計         |
|-----|------------|------------|
| 収入  | 5,960,823  | 71,564,735 |
| 支出  | 9,869,666  | 31,767,714 |
| 差引  | △3,908,843 | 39,797,021 |

上表の当期経常増減明細を承認しました。

### (3) 全国大会「鹿児島・大阪」の体制

#### ①大阪大会の改革

CPD対象となる研修企画を重視し、これまでの懇親色を抑える方針です。基調講演・大阪企画2種の計3点は、いずれも万博及び大会テーマ「建築からソーシャルデザインへ」に関与する企画内容とし、大会における研修色を強調します。エクスカージョンは万博の他に、堂島川遊覧（実行委員会）、歴史的建造物見学（ヘリテージ）、建築マップ（青年女性）を企画中です。

#### ②大阪大会の取組み

エクスカージョン企画及び大会当日・前日等の協力体制を整えるために、次回の企画会議に部門長並びに委員長に参集をお願いします。

#### ③鹿児島大会での大阪大会PR活動他

大阪大会アピール用の名刺デザインは、静岡大会時と同様として、鹿児島大会参加者全員に配布協力をお願いします。以上の全国大会に臨むそれぞれの方針を承認しました。

### 田中克之常任理事が国土交通大臣表彰を受賞

本会常任理事の田中克之氏は7月10日に建設事業関係功勞による国土交通大臣表彰を受賞されました。氏は35年間に亘り、常に安心・安全・快適なモノづくりの建築設計業務に携わる一方で、1990年に本会に入会し、建築物の調査耐震診断・インスペクション・建築相談等を担う委員会をまとめ、2018年の大阪北部地震や台風21号による災害対応では、応急危険度判定・罹災証明のための建物調査・災害保険に伴う調査を行い、その後も災害調査マニュアルの作成や研修講師など社会貢献部門長として諸活動を牽引されています。また釜山広域市建築士会や他の海外建築団体との国際交流などにも尽力しています。

## 「登録」に向けて—泉州地域の民家の特徴と所見作成・実測のスキルアップ

日程：令和6年7月6日(土)

会場：水間の庄屋屋敷 井手家住宅

参加者：20名

令和6年度 大阪府ヘリテージマネージャー・スキルアップ講習の第1回は、上記タイトルの内容で、共催：大阪府教育庁、協力：貝塚市教育委員会、企画：社会貢献部門ヘリテージ委員会・大阪府ヘリテージマネージャー協議会にて実施されました。

会場は、南海本線貝塚駅から水間鉄道に乗り換えて15分、終着駅の水間観音駅下車、徒歩10分ほどの水間の庄屋屋敷 井手家住宅でした。主屋は、現存する棟札から享保2年(1717)、今から307年前の建築と推定され、長屋門、米蔵、納屋、土蔵を備えています。中世から近世の古文書が多数残されていて、文禄3年(1594)からは江戸時代を通じて、代々庄屋を受け継いでいます。

本講習は、この井手家住宅を登録文化財にすることを想定して、実践的な調査と所見作成の実務をより具体的に学びました。

講師は、大阪府下で多くの文化財指定・登録

や調査研究にかかわってこられた貝塚市教育委員会の地村邦夫氏にお願いしました。

午前中の講義では、登録文化財の制度と登録基準、登録へ至る手順、登録のための調査の説明の後に、泉州地域の民家型式の特徴と時代ごとの変遷の説明がありました。

午後からは、実際に井手家住宅を見ながら所見の書き方、現場でのスケッチの取り方と復元平面図の描き方を学び、調査・実測演習を行いました。

講座修了後には、実測図・CAD図・所見を提出し、地村氏の添削とコメントを受けて、講習の成果を確かなものとしします。

また、一般財団法人井手家文化財・貝塚市地域資源保存活用支援財団の南川孝司氏から、井手家の歴史と敷地内の案内、ヘリテージマネージャーとしての財団等の活動についての説明がありました。

梅雨の合間の真夏日、猛暑での実測作業で

澤谷 宏(ヘリテージ委員会 委員)



したが、開け放たれた縁側から時折吹き渡る涼風に、古民家の趣を感じました。

大阪府ヘリテージマネージャー・スキルアップ講習は、今年度内にさらに5回の開催を予定しています。ぜひご参加ください。



## 建築相談室から(86) 前向き相談

建築相談ではそのほとんどが建築トラブルにまつわる相談ですが、ときどき前向きの相談があります。建築士としては、本音はトラブルや紛争の相談よりも前向きな相談がうれしいです。今月はそんな相談をご紹介します。

設計者や工務店を紹介してほしい

まだ両親が住んでいる築60年の実家を譲り受けてリフォームして住みたいと考えている。設計事務所や工務店知り合いがいないので相談にのってほしい。という相談がありました。住宅を設計する仲間たちに紹介をしたとのことでした。

設計者に連絡が取りたい

近くの住宅が気に入ったので、その設計者に連絡を取ろうと思うが、事前にどんな人か知っておきたい。直接連絡を取るの失礼に当たるのか教えてほしいとの相談。その設計者は住宅を設計する仲間たちには

登録していなかったとのことで、ホームページで検索して遠慮無く連絡すればよいと思う。そんな連絡はうれしいと思います、との相談記録。

賃貸住宅の間取りに関する相談

3階建て3戸の鉄骨造賃貸住宅を計画。間取りについて相談したい。リビングはバルコニーありの北側。洋室は北面と西面に窓があり、玄関は南側。東西両側にはともに2階建て住宅があり、北側は道路を挟んで建物がある。リビングは暗くならないか。洋室の西側はペアガラスだが、夏は暑くならないか、西日がきついのか、太陽光パネルを設置するがどの程度の発電量を見込めるか、などの相談。担当者は丁寧にひとつずつ答えておりましたが、電話での相談なのでどうしても想像力だけで限定した回答しかできずにもどかしさが見られました。セカンドオピニオンの相談かもしれませんが、相

橋本頼幸(建築相談委員会幹事)

談者が許せば図面を見ながら面接相談でもよかったかもしれません。

売建てのプラン相談

間口が狭く2階の階段を上った場所の扉をガラス引き戸にしたい。ガラス引き戸にするとペニンシュラキッチンしかできない。アイランドキッチンを希望しているが、ダイニングとリビングが狭くなり考えている。こちらのプラン例は壁つけとのこと。こちらもよくある悩みに見られますが、担当者は自身の経験からも丁寧に答えられていました。

長屋のリフォーム

友人の長屋を借りるのだが予算1000万円で改装したい。現地相談できるのであれば友人同席の上で現地相談してもらいたい、との相談。友人と相談して連絡してください、との連絡待ちになっています。建築士会の相談が前向きな相談ばかりで笑顔であふれたら良いなぁと願います。

建築士会からのお知らせ

既存建築物耐震診断等の評価

不特定多数が利用する施設や沿道建築物など、申込者が検討した建築物の耐震診断及び耐震補強計画について、専門的観点のもとに審査・審議を行い、妥当であると認める申込案件に対して評価書を交付します。

- (業務内容)  
耐震診断報告書や耐震補強計画書の審査、評価 等
- (対象建築物)  
公共・民間等の建築種別、所在地、用途、規模、構造種別は問いません。
- (会員特典)  
申込者又は診断等実施者が本会会員の場合は、評価手数料が10%割引となります。

【WEB版】確認申請のプロ養成講座 初級編

8/1～10/31 CPD3単位

なかなか教えてもらえなかった確認申請。その基本を知るだけで、あなたは確認申請のプロと呼ばれる。訂正項目が少なく、審査がしやすい申請図面が作成できれば建築着工も安心!常に変化している確認申請の世界。住宅の省エネ適合義務化や4号特例の縮小、そして申請のデジタル化による電子申請などの最新事情がわかる。

- ★フォローアップ付き!
- 受講者の皆様には確認申請書の書き方等に関する質問に対応いたします。(7/31まで)
- ※2024年2月28日に実施した同名の講習会と5～7月に配信した同名講座と同内容です。
- 視聴期間 8/1(木)10:00～10/31(木)終日
- 配信方法 WEB講習
- 受講料 建築士会会員:6,000円  
後援団体会員:6,500円  
一般:7,000円
- 主催 (一社)近畿建築確認検査協会
- 共催 (公社)大阪府建築士会

既存木造住宅の耐震診断・改修講習会 (限界耐力計算法)  
8/21 CPD4単位

既存木造建築物の限界耐力計算法による耐震診断は、建物の強度だけでなく、減衰性能も評価することができる診断法です。講習の修了者名簿は大阪府内の市町村等に常備し、耐震診断を希望する建物所有者等からの問合せに活用します。

日時 8/21(水) 10:00～15:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
定員 30名(定員に達し次第締切)  
受講料 会員6,000円、一般8,000円  
テキスト代 4,000円

令和6年度 建築士定期講習  
8/23、9/19、10/18、11/20、12/13、1/22、2/4、3/27 CPD6単位

建築士法の規定により、建築士事務所に所属するすべての建築士は3年以内ごとに定期講習を受講しなければなりません。本年度は令和3年度に本講習を受講された方や、建築士試験に合格された方が対象となります。未受講者は懲戒処分の対象となりますので必ず年度内に受講してください。

- ▼対面講義  
日程・会場・定員  
※8/23(金)大阪府建築健保会館 受付終了  
9/19(木)大阪府建築健保会館 90名  
※10/18(金)大阪府建築健保会館 90名  
※2/4(火)大阪YMCA会館 200名
- ▼DVD講義  
日程・会場・定員  
11/20(水)大阪府建築健保会館 90名  
※12/13(金)大阪府建築健保会館 90名  
1/22(水)大阪府建築健保会館 90名  
3/27(木)大阪府建築健保会館 90名  
※の日程 大阪府建築士会が運営  
※以外の日程 大阪府建築士事務所協会が運営(注)各回定員に達し次第、受付を終了します。  
時間 9:15～17:00(各講習日共)  
受講料 12,980円(消費税含。事前入金)  
申込 下記URLよりお申込みください。  
インターネット申込みができない方

は、大阪府建築士会HPの定期講習の案内をご確認ください。  
[https://www.jaeic.or.jp/gyomu/off\\_teiki/index.html](https://www.jaeic.or.jp/gyomu/off_teiki/index.html)

既存住宅状況調査技術者講習  
新規講習9/11、11/13  
更新講習10/9、12/11、3/12  
CPD新規5単位、更新2単位

既存住宅状況調査は、登録機関の講習を修了した建築士のみに認められる業務です。ぜひ本講習で新たな業務の資格を取得してください。令和3年度に本講習を修了された方は本年度が有効期限のため更新講習をご受講ください。

- ▼新規講習(DVD)  
日時 9/11(水)、11/13(水) 9:30～17:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
定員 30名(定員に達し次第締切)  
受講料 WEB申込21,450円  
郵送申込22,000円
- ▼更新講習(DVD)  
日時 10/9(水)、12/11(水)、3/12(水) 13:30～17:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
定員 30名(申込先着順)  
受講料 WEB申込17,000円  
郵送申込17,600円  
申込 日本建築士会連合会HPより。上記以外にオンライン講習も開催。  
<https://www.kenchikushikai.or.jp/koshukai/kizonjyutakujyokyochosa.html>

令和6年度監理技術者講習  
9/26 CPD6単位

本講習会は建設業法に基づく法定講習であり、建築に特化したテキストを使用し、経験豊富なベテラン技術者の講師による解説と映像で、実務に役立つ情報を提供いたします。なお、監理技術者以外の建築士や技術者の方も受講が可能です。日頃の工事監理業務に役立ちますので、ぜひご受講ください。

日時 9/26(木) 8:55～17:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室



Informationの詳細及び申込みは大阪府建築士会ホームページに掲載しています。  
http://www.aba-osakafu.or.jp/ メール info@aba-osakafu.or.jp  
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103

定員 30名(申込先着順)  
受講料 WEB申込み9,500円  
郵送申込み10,000円  
申込 日本建築士会連合会HPより  
http://www.kenchikushikai.or.jp/torikumi/news/2015-07-28-2.html

## 既存木造住宅の耐震診断・改修講習会 (一般診断法)

12/3 CPD5単位

本講習会は、大阪府及び府内市町村の木造住宅耐震診断・改修の補助を受けることができる技術者の養成を目的としています。講習の修了者名簿は大阪府内の市町村等に常備し、耐震診断を希望する建物所有者等からの問合せに活用します。

日時 12/3(火) 10:00～15:50  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
定員 30名(申込先着順)  
受講料 会員5,000円、一般9,000円  
テキスト代 7,300円

## 大阪・関西万博のユニバーサルデザイン ～障がい当事者が望んでいる事～

8/26 CPD2単位(予定)

万博のユニバーサルデザインガイドライン検討会に、委員として関わられた車いすユーザーである堀篤子氏に講師を依頼し、障がい当事者からどのような意見が出され、ガイドラインに反映されていったのかについてお話しいただきます。さらに、大阪府担当者から福祉のまちづくり条例について、現在検討中の内容に関する説明もあります。

日時 8/26(月) 18:00～20:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
講師 堀 篤子氏(NPO法人ちゅうぶ/万博UDガイドライン検討委員)

参加費 会員1,000円、会員外1,500円  
学生・新入会会員(入会后1年程度) 無料  
定員 50名(申込先着順)  
協力 大阪府

## ～見て、聞いて、触って 防災の大切さを心に刻む～ 津波・高潮ステーション見学会

8/30 CPD2単位

近い将来必ずや大阪を襲うと言われている南海トラフ巨大地震と津波について正しい知識を習得していただき、災害への備えの大切さを心に刻んでいただき、防災の“心がまえ”をしませんか?高潮、津波、地震などのブースや津波災害体感シアター等盛りだくさんの企画となっていますので、ぜひご参加ください。

日時 8/30(金)  
14:00～16:00(受付13:45～)  
会場 津波・高潮ステーション見学会  
(大阪市西区江之子島2-1-64)  
(阿波座駅10番出口 徒歩2分)

定員 30名(申込先着順)  
受講料 500円

## — 文化財保存 — 「四天王寺 六時礼讃堂・中心伽藍」

数十年に一度行われる木造重要文化財の保存工事現場見学会/RC造 中心伽藍の耐震補強説明会

9/12 CPD2単位

江戸初期に再建された四天王寺境内の六時礼讃堂(重要文化財)について、昨年の暮れより大規模な保全修理が進行中です。仮設足場から工事現場を見学します。また2018年に耐震改修された中心伽藍の説明会も実施します。

日時 9/12(木) 13:30～15:30  
会場 四天王寺境内  
定員 20名(申込先着順)  
参加費 会員1,000円、一般1,200円

## 住宅を設計する仲間達交流会 ～建築家 大西憲司氏にきく～

10/9 CPD2単位(予定)

建築家の大西憲司氏をお迎えして、大阪建築コンクール大阪府知事賞に選ばれた「富田のコートハウス」等の作品について、対話形式

でお話していただきます。若手設計者はもちろん、気持ちの若いベテランも大歓迎です。

日時 10/9(水) 18:30～20:00  
会場 大阪府建築士会 東会議室  
講師 大西憲司氏(大西憲司設計工房)  
参加費 会員1,000円、一般2,000円  
学生500円

定員 50名(申込先着順)

## 行政からのお知らせ

### 建築物のライフサイクルカーボン算定ツール『J-CAT(ジェイキャット)』試行版の公開(国土交通省)

2050年カーボンニュートラルの実現に向け、建築物のライフサイクルカーボン算定ツール『J-CAT(ジェイキャット)』試行版が公開されておりますので、是非ご活用ください。

■建築物のライフサイクルカーボン算定ツール試行版

https://www.mlit.go.jp/report/press/house04\_hh\_001226.html

■ライフサイクルカーボンの算定手法の構築  
https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001743089.pdf

### 「建築人」Gallery掲載作品の募集

本誌「建築人」は毎月約3,000部を発行し、本会会員をはじめ官公庁、大学、図書館、出版社、報道機関等に頒布しています。Gallery掲載作品は「建築人賞」の候補となります。

●掲載記事 1頁カラー、写真4点程度

●掲載費用 100,000円

※1 初回割引80,000円(設計者および施工者が過去10年間、Galleryに掲載されていない場合)

※2 若手初回割引50,000円(40歳以下かつ建築設計事務所を主宰され※1を満たす方)

●詳細・申込 事務局担当: 母倉  
e-mail: info@aba-osakafu.or.jp  
TEL: 06-6947-1961

## ウクライナの建築と文化を学ぶ



研修部門長(国際委員会担当) 荻窪伸彦

ロシアのキウウ侵攻から2年半、いまだに収束が見えない現状が続いているウクライナ。多様な文化が混ざりあい、ロシア発祥の地とも云われていますが、その歴史は複雑なものでした。建築を生業とする私たちは、世界各地で繰り広げられている戦争による都市の破壊に対して、戦争を終わらせる力はないけれども、これまで培ってきた設計の知識や工夫は、それらの都市の復興に対して、世界的社会貢献として手助けできるものであります。今この時点で、ウクライナの建築と文化を学ぶことは、ウクライナ復興に向けての日本の建築支援の準備として遅くないと思い、今回の企画を立ち上げました。

セミナーは以下のプログラムを組みました。

1. ウクライナの文化と現状報告（小野元裕会長）
2. ウクライナの古建築：木造と石造の魅力な世界（ガリーナ・シェフツォバ教授）
3. トークショー（小野会長、ガリーナ教授、岡本大阪府建築士会会長、佐野大阪府建築士事務所協会名誉会長）
4. 特別歌唱：ウクライナ国歌等の斉唱（Ono Aki先生）



## 会場の様子



開催の挨拶をする岡本会長

会長の説明では、ロシアはウクライナの子弟、ウクライナがお母さんで、ロシアは息子という定義をされています。第2次世界大戦でのナチスからの攻撃、そののち、ソビエト連邦に組み込まれ、1991年ソ連の崩壊で、再びウクライナ民族の団結からウクライナ国家を形成します。その母なるウクライナに対して、強大になった息子が襲ってきているのです。10年前に始まった、クリミア半島の征服、そして今回のキーウ侵攻と世界秩序を乱してまでもロシアはウクライナを攻め続けています。ウクライナの戦いは、「我が家に侵入してきた泥棒を追っだしているだけ」、中途半端な和平や停戦を行っても、ロシアは侵攻を止めないと言います。

## 2. ウクライナの古建築：木造と石造の魅力な世界

ガリーナ教授は、文部省国際交流基金の奨学生として来日、近畿大学、京都大学で研究を行い、キウ国立建設建築大学の教授となり、ウクライナの古建築の研究を行っています。



日本語で講演するガリーナ教授

講演の要旨は以下となります。

ウクライナの建築は、西部はスカンジナビア、西ヨーロッパ、東と南ヨーロッパ、南部はビザンチン、アラビア、イランと様々な建築様式の影響を受けています。紀元前2000～3000年の埋葬品から発掘された家形埴輪は日本の古墳時代の家形埴輪と比べると、よく似た様式がみられます。

10～12世紀のキエフ大公国時代には、聖堂が造られていきますが、他国の聖堂が一つの



## セミナーチラシ

## 1. ウクライナの文化と現状報告

約20年前、日本ウクライナ文化交流協会を創設し、毎年のようにウクライナと日本を行き来し、日本の文化の紹介など、ウクライナとの交流を深めてきた小野会長による講演。



ウクライナの歴史と現状を語る小野会長

ウクライナの国の誕生の歴史は複雑で、ヨーロッパとロシアの中間地点にあり、様々な民族がウクライナの地で生きていました。小野

ドームを中心とした形式に対して、キエフの聖堂は複数の塔状のドームで構成された形式となっています。また木造の構造は、日本の校倉造りと同じ様式で造られており、その発展の経緯は、穀倉庫から小聖堂へと変化していきます。日本を見ても、高床式倉庫から発展した神舎の形式は、ウクライナも日本も豊かな農業国としての歴史が似ていることから、同様の考え方で建築が発展してきたと思われます。

ウクライナの木造教会のタイプは、5つの地域に分類することができるそうで、東ウクライナ地方は平たんな土地柄ゆえに遠くからでも認識できるように塔が高く造られているのに対して西部の山岳地帯では小高い山の上に造られる聖堂は認識しやすいため、低い聖堂となっています。1775～1780年に造られた、「聖三位一体聖堂」は9つの塔が組み合わさった形状で特に珍しい形式となっています。

日本の建築物と比較すると細部は異なっていますが、全体の雰囲気は同じように見えるものが多く、ガリーナ教授は檜皮葺の屋根にまで日本との類似性を見出していました。

### 3. トークショウ

お二人の講演の次に、小野会長、ガリーナ教授、岡本会長、佐野名誉会長の4名によるトークショウを行いました。ガリーナ教授に対しては、ウクライナの木造教会建築と日本



小野会長とガリーナ教授



佐野名誉会長と岡本会長

の教会建築に関する質疑など、小野会長にはウクライナの生活や独特の風習、女性を尊重する習慣などのエピソードを交えたウクライナ人の気質など多様な内容の意見交換を行いました。

### 4. 特別歌唱

小野会長夫人で歌手のOno Aki先生により、「キーエヴェ ミイ」とウクライナ国歌「ウクライナは滅びず」の2曲をアカペラで披露頂きました。「キーエヴェ ミイ」は1,2番がOno Aki先生の訳詞による日本語で歌って頂き、より親しみがわきました。ウクライナ国歌は全員起立し、右手を左胸に当てた（敬意をもった）状態で聞きました。



ウクライナ国歌を歌うOno Aki先生



敬意をもってウクライナ国歌を聞く様子



閉会の挨拶をする佐野名誉会長

### 5. まとめ

一般紙等に取材依頼を行った結果、当日の読売新聞朝刊にイベントの紹介記事が掲載されました。セミナーには建通新聞社と日刊



懇親会の様子

建設工業新聞社が取材に来てくれました。今回の企画は、ウクライナという国を知ることが目的としており、小野会長にはウクライナの国の歴史とロシア侵攻悲惨さの状況を、ガリーナ教授にはウクライナの古建築として木造教会建築を中心としたウクライナと日本の木造建築との類似点などを教えていただき、ともに新しい知見や発見がありました。国際情勢としてニュース等で垣間見ているウクライナに対して、正しい見方が分かり、成果としては大きなものが感じられました。セミナー後のスタッフのみでの懇親会にも小野会長、ガリーナ教授、Ono Aki先生も参加して頂き、セミナー全体の成功を喜んでいただきました。主催者としては、このセミナーを今後も続けていきたいとの思いで終了した1日でした。

- 主 催：(公社)大阪府建築士会  
(一社)大阪府建築士事務所協会
- 開 催 日：2024年6月24日(月)  
18:30～20:30
- 開催場所：大阪市中央公会堂 小集会室
- 参 加 者：52名
- 講 師：小野元裕氏(日本ウクライナ文化交流協会 会長)  
ガリーナ・シェフツォバ氏(キエウ国立建設建築大学 教授)
- 特別歌唱：Ono Aki氏
- 記 録：村上栄司、北村ひとみ(チラシ・冊子編集)



## 齋藤公男 Masao Saitoh

特集「建築びとに訊く」は、建築に関わる「建築びと」に未来の建築について語っていただきます。建築そのものだけでなく、「人」に焦点を当てることで、多角的な視点や新規性も踏まえた幅広いテーマについてお話を伺います。

社会全体が目まぐるしく変化するにおいて、建築界も常に進化を求められています。建築はデザイン、テクノロジー、人間哲学、ライフスタイルなど様々な職域をまたいで成立すると考えられます。建築の未来を見通すためには、順応性を高めるために広い視野を持つと同時に、未来に繋がる上で重要なポイントにフォーカスする目線が必要であると考えます。

様々な「建築びと」の視点を垣間見ること、建築界全体の未来への一歩へ繋がることを期待しています。

第二回は、構造デザイナーの齋藤公男先生にインタビューを行いました。齋藤先生は、構造から建築デザインを創造されている構造家でありデザイナーです。

現在は、A-Forumを主催され、先生が提唱された「アーキニアリング・デザイン (AND)」の理念の実践として、構造とデザインを中心テーマにした研究会やフォーラムを意欲的に開催されています。

デザインという狭義の定義を越えた視点と思考をどのように培って来られ、構造の分野から建築界に一石を投じて来られたかを語って頂きました。

尚、このインタビュー記事は、先生の優しい語り口調をできるだけ残しながら記事にまとめさせて頂いています。

### 略歴

|       |                                |
|-------|--------------------------------|
| 1961年 | 日本大学理工学部建築学科卒業                 |
| 1963年 | 日本大学大学院理工学研究科<br>博士前期課程建築学専攻修了 |
| 1973年 | 日本大学理工学部建築学科助教授                |
| 1991年 | 日本大学理工学部建築学科教授                 |
| 2007年 | 日本建築学会会長(第50代)                 |
| 2008年 | 日本大学名誉教授                       |
| 2014年 | A-Forum代表 現在に至る                |

### 主な受賞

|       |             |
|-------|-------------|
| 1986年 | 日本建築学会賞(業績) |
| 2007年 | 日本建築学会教育賞   |
| 2018年 | 日本建築学会大賞    |

### 主な著書

|       |                      |
|-------|----------------------|
| 2003年 | 「空間 構造 物語」(彰国社)      |
| 2014年 | 「新しい建築のみかた」(エクスナレッジ) |

ー本日は「デザイナー」としてインタビューをさせて頂きたいと思います。

インタビューの依頼を頂いて、最初に面白いと思ったのは、自分が何者かという言葉の定義です。構造技術者や構造家、構造デザイナー等の呼称の問題は、非常に意義のある難しい議論だと思いますね。

日本と海外を比べると違いが見えてきて、設計者と技術者という言葉そのものが異なっている。海外では、アーキテクト（建築家）とエンジニア（技術者）に分かれており、構造設計者はストラクチャル・エンジニアとなり、技術者なんですね。

構造設計と構造デザインで、何が違うかが一番大事で、ぼくの定義で言うと、構造設計者は建物を安全かつ経済的に作り、社会的にきっちり説明できる人格者であり、職能としてリスペクトされるものだと思います。

構造設計者は社会的責任とニーズに応えているけど、建築家との協働においては、構造デザイナーはより良い物を目指す哲学や戦略、先進性等の $+\alpha$ が絶対必要になる。その $+\alpha$ に対して、自分の考えや思いを構造デザイン的な表現として目指したいと思っています。だから、ぼくは構造から建築デザインを創造する構造デザイナーとして、拘りたいと思っていますね。

ー建築を学ぼうと思われたきっかけや動機をお聞かせください。

よく「あの建築を見て建築家になろうと思った」とか、建築家の方々は言われますが、ぼくはそういうのは無かったですね。

父が弓道をやっていて、80歳代の高齢になっても弓道連盟の会長をやりながら、実業家として様々な事業を行っていました。日本語の「文武両道」という言葉が凄く好きで、前橋高校も文武両道を掲げた学校なんですね。ぼくは理系も文系も好きで、どちらが合っているか自分自身分らず、何となく理系と文系に跨っている事が文武両道に絡んでいるなと思っていました。大学を受験する時に進路が決まらず、体が丈夫なら申し分ないと知己の先生に建築を勧められました。現場もあり絵を描き計算もする、建築はそういう面白い領域なので、入ってから悩めばいいんじゃないかと言うことでした。

建築を文系で受験するのは早稲田大学と日本大学しかなく、当時はデザインの早稲田、構造の日本大学と言われ、日本大学を受験したら合格しました。

構造の先生が揃っていて、力学のカリキュラムも多く、特に曲げモーメント図や応力図を描くのが実に楽しかったですね。でも、そういう

ことをやりながら、デザインにも結構興味がありましたね。

ー日本大学理工学部建築学科に進み、デザインの思考を持ちながら、坪井研究室を選ばれたきっかけや動機をお聞かせください。

当時の坪井義勝先生は、1951年のリーダーズ・ダイジェスト事件（リーダーズ・ダイジェスト東京支社における構造論争）で、アメリカの構造家ポール・ワイルドリッガーに対し、「耐震設計がおかしいんじゃないか」と対抗する旗頭となった人なんです。その2年後に、丹下さんと組んで愛媛県県民会館を設計しました。今まで耐震だけをやっていた世界から、建築家とデザインを協働でやることを坪井先生が見つけたわけです。

また、大学に入った頃から海外の建築情報を得るメディアや雑誌が出てきて、当時のヨーロッパの曲面構造やシェル構造の新しい技術に、フランクロイド・ライトやフェリックス・キャンデラ等の建築家が一気に現れて、すごい刺激を受けました。それらを見るとアーキテクト・エンジニアが作ってる作品がほとんどでしたね。そこで、新しい空間の創造をどこで勉強すれば良いか考える中で、坪井先生と丹下さんがやっている事が見えてきて、坪井研究室の扉を叩いた。構造とデザインを勉強したいという、曖昧なぼくの思いを坪井先生は受入れてくれました。

大きな転機になったのが、三つあります。その一つが、卒研テーマとなったバックミンスター・フラーの研究ですね。1960年代にフラーが日本でも知られ始め、坪井先生から「フラーって変なやつがいて、俺のライバルみたいだ。敵情を探れ。」と言うミッションを与えられて、研究に取り組みしました。当時は文献が無く、フラードームやテンセグリティ、何より「宇宙船地球号」と言うキーワードが衝撃的でしたね。フラーの自然界や地球資源を考えて物を創るエンジニアリングやテクノロジー的な発想と、地球を外から見る視線を学びました。

二つ目は、大学院1年生の冬から基本構想が始まった国立代々木競技場に参加し、建築家とエンジニアが協働して、基本構想から作るプロセスを見ることができた。大局的な普段見られないことを目の前で見られたのが、全てのスタートになりました。

三つ目は、国立代々木競技場と東京カテドラルの設計が同時期に同時にスタートし、佳境となった頃、さらに下関市体育館の設計依頼が来て、坪井先生が建築デザインと構造設計全てやることになりました。研究室で一番暇そうなのが斎藤でした。「あいつはデザインをやりたいと言ってたからやらしてみよう。」と

なり、基本構想から担当させてもらいました。構造計画から実施設計をほとんど一人でやった訳です。

坪井研究室在籍の3年間で、こんな纏まった経験をしたのは、あり得ない奇跡で、これがぼくの一番の原点となりました。

ー構造デザイナーとして、建築に関わる役割や責務とは何でしょうか。

構造設計の基本は、安全で経済的なものを建築家と協働しながら作ることが一番の任務だと思います。

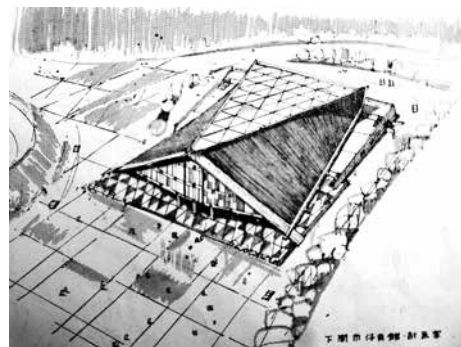
ぼく自身の経験で言うと、プロジェクトによってミッションも違うしテーマも違うので、プロジェクト毎に建築家やクライアントに対して、距離感や自分の役割りを常に意識しています。設計事務所だと、仕事として利益等を考えないといけませんが、ぼくは大学に居るので、研究と教育と設計を常に一緒に考えることを自分のテーマとしていました。

建築家のデザインやプロジェクトの方向性がかかなりハッキリしていて、例えば、ザハ・ハデイド的な物を実現したいけど、何とかありませんかと言う相談が来たとします。そういう時は、優秀な教え子や友人が居る構造事務所を紹介します。

コストがないけど何か面白いことがしたいとか、逆にぼくが面白いと思ったり、これはちょっと問題がありそうだとか、そういう事を見極めながら受けるようにしています。一種の駆け込み寺的でもありますね。



東大生研での大学院生時代、「戸塚カントリークラブ」の現場にて 川口衛先生ら坪井研のスタッフと共に。(1961)

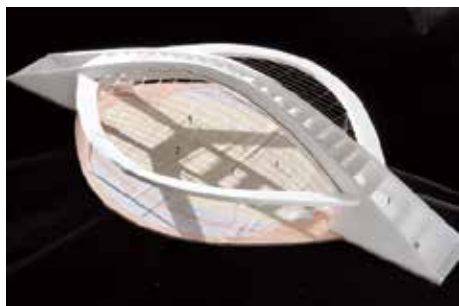


「下関市体育館」の基本計画時に示した外観パース (1962, 筆者描く)

ー建築家と構造デザイナーの調和が重要だと思いますが、建築家と協働する際に心掛けられていることは何でしょうか。

あまり建築家の恣意性に向かわないようにしています。建築家の思いは分かりますが、プロジェクトがどこに向かっているのか、そのために何を作ればいいのか、空間をどう作ればいいのかを考えますね。

建築家もいろいろなテーマを持っていて、その中でも空間をどう作るのが大きなテーマだと思います。しかし、ばくも構造的検討に経済性も加えて、空間をどういう風を実現するかに重きを置いているので、建築家のデザインのイメージは出来るだけ尊重しますが、空間を力づくでつくりたいと言う思いは、あまり聞かないようにしています。それを聞いてしまうと、途中で挫折する危険があり、やり直す時間も無くなります。冷たいようですが、建築家の思いを見ながら、建築家と構造の間に「空間」を置いて、どうしたら良いかを考えています。その時に、難しいことは、こちらが考えるアイデアや提案を出す「タイミング」ですね。早すぎても、遅すぎても上手くいきません。



「岩手県営体育館」(1967)の構造模型。4本のアーチは空調ダクトを内蔵している。

ー構造デザイナーが建築家と協働する上で、重要な能力や要素は何でしょうか。(若い設計者に向けて)

エンジニアとして大事なのは、プロジェクトに対していろいろなアイデアを出すために多様に考える能力が必要で、オルタナティブに考えることが大事ですね。直ぐにコンピューターに向かっていくのではなく、自分の発想をスケッチなり模型なり、或いは言葉で表現する能力が問われると思います。計画の基本構想段階の物語が大事で、建築家とどういう議論をして、その計画を考えたかを物語性を持って簡潔に説明出来ないといけないですね。ルーティーンに乗ってやる仕事もエンジニアの仕事ですが、 $+\alpha$ のところは一種の建築家的というかクリエイティブな能力があると世界が変わってくるので、若い人はそういう能力やセンスを身に着けるといいですね。

また、ファブリケーションや材料の在り様を設計が決まってから考えるのではなく、設計する中でどういうディテールで、どういう素材を使うのか、実際にどう施工するのかをトータルに検討する必要があります。そのために、若い人は好奇心を強く持ち、多くのことを見たり聞いたりして知識を増やし、自分の経験を少しずつ積み重ねて自信が持てる仕事を徐々に増やしていくことが大事です。そのように積層させていくことがエンジニアの楽しみで、一番の魅力だと思いますね。

ー日本では、建築技術や構造材料の進歩は、地震によって進歩してきたところが大きいと思いますが、今後も、建築と地震はどのように共存していくのが良いのでしょうか。

これはすごく難しい問題で、みんなが自問自答していて、答えが出ていないと思います。基本中の基本として、物を壊してはいけない。しかし、建築基準法では人命のことだけで、物が壊れることに対しては言っていない。資産としての事を考えれば、どういう風に財産として維持出来るが大事ですが、建築界の職能でどうにかなるわけではないですね。

また、安全性と経済性は対になっていて、できるだけ安く作ろうとか、コストを安くした方に仕事が行く流れがあり、建築基準法そのものを変えない限り、解けない話ですね。

そういう中でも、建物の耐震や安全性に対して真剣に取り組んで、最大限努力している人がたくさん居ると思いますが、施主が安全性に対する理解を国民的レベルで広げない限り動かないわけですね。

この間もA-Forumで、「愛を持っている構造技術者よ、立ち上がれ」と言ったかっこいいテーマでフォーラムをやりました。愛をみんな

持っていても、その「ラブ」をどう表現するかというのが一番の問題で、個人や建築関係の協会とかの職能団体が声を上げて、自分たちの利益のためにやっているのではないかなと思います。建築基準法に対する考え方とか安全性に対し、エンジニアとアーキテクトが提案をした時はもっと聞く耳を持って欲しいと、オール建築界で発信しないといけないと思います。新聞等の商品広告のように、建築界も広告を出して、「本来建築とはこういう物で、安全性とコストを施主自身が考えればいくらでも立ち向かっていけるんだ」みたいなメッセージを建築界がトータルにやらないといけないですね。

ー特殊素材による構造体に関する研究も盛んですが、先生がご興味を持たれている新素材があれば、お聞かせください。

新素材はどんどん出てくると思いますし、今は実験的にいろいろ出来ると思います。但し、建築の持っているスケールは凄く大事で、小さい物で上手く行った構法が大きい物で出来るわけではない。実験的にやることと、スケールアップした時の問題は、しっかり検証する必要があり、模型で出来ても実物の大きさでは出来ないと大変な事になります。スケール感を含めた実現性に対することは、分けて考えていけないといけないですね。

もう一つは、20世紀に多くの様々な技術が発明され普及しました。でも、かつて開発された多くの技術に対して、今ならそれをどういう風に使えるかと言う検証や見直しは意外と少ない。メディアも新しい物ばかり取り上げています。新しい素材を研究すると共に、既存のマテリアルを使って様々なことをする面白い研究テーマはたくさんあると思いますね。

ーBIMを使った3次元設計が進むと、デザインの自由度が高まり、様々な形態の建築が創造されてくると思います。構造デザイナーとして、どのように見ておられるのでしょうか。

BIMを詳しく知らないですが、生産性から考えると設計と生産を繋ぐツールとして大切に、今は設計の段階にどんどん入って来ていますね。アーキテクトはデジタルで絵を描くと、直ぐにBIMに行きたがり、「待てよ。まだ構造計算をやっていないのにダメだよ。」とよく言います。ディテールを決めて描かずに、とりあえずっというのが一番危ないですね。

構造計画とか構造計算と言った言葉が分らない世界が増えていて、お絵かきの世界がすぐリアルな立体になるだけで、建築として成立することは何かが考えられていません。特にヨーロッパ系のアーキテクトを相手にすると、これが一番悩ましいですね。

ー建築の長寿命化が課題となっています。既存建築や今後の建築の長寿命化に対し、どのような目線を持つことが重要でしょうか。

ぼくが60年くらい前に設計した建物は結構残っていて、それぞれの行く末がバラエティに富んでいます。基本的には、市民に愛されるというような抽象的な概念と新しいニーズの2つが大きいキーワードですね。

新しいニーズと言えば、例えば下関市体育館の場合、昔は地方都市にのど自慢等を行う公会堂がなく、公会堂と体育館をそれぞれ作るお金も無く、国体のための体育館建設において、公会堂と体育館の機能を併せ持つ日常的に使える施設を求められ、加えて新しい構造空間を作るのがテーマでした。現在はアリーナと体育館という概念が、国も主導しながら全国に広まっていて、アリーナの空間として箱を作ればよく、あちこちで同じようなものが出来ています。折角、何十年もの間、一つのモニュメントとして大規模な公共性ある建物を作るので、何か工夫して用途を少しでも変えながら、社会やまちに共存できると一番いいと思いますね。

岩手県営体育館は、数年前に日経アーキテクチュアの巡礼建築ポストモダンに取り上げられ、40年経って初めて評価されました。キールアーチで作っており、ザハ・ハディドの新国立競技場に似ていると話題が高まって一気に取り上げてくれました。県民にも愛されていて、DOCOMOMO Japanにも登録され、耐震補強も行い残されるようになりました。

残すためには市民が支える舞台とか、それがどのくらい残す価値がある建築かと言うことがあれば、残し得ると思いますね。行政に対し市民が声を挙げるためにも、保存を支援する良い建築家の存在は凄く大きいと今日は言いたいと思っています。

ーこれから人口減少時代を迎え、建築やまちの創り方がどうあるべきと思われますか。

人間の社会は一言で言うと、「欲望と抑制」とぼくはよく言いますが、市場経済で東京も大阪もまだまだ使える建築がどんどん壊されていく。これは、人間の業というか社会の欲望ですよね。それに対して、どう抑制するかをまちづくりも含めて考えないといけない。これも答えはないですが、やはりどういう風に人間が生きて行くかみたいな、そういう話から始まるかなと思います。

ぼくは、冒頭に言ったバックミンスター・フラーが提唱した「宇宙船地球号」が凄く好きで、有資源のこの時代にどうするかと言うフラーの哲学は、もっと大きく今の世の中に出て行っているんじゃないかと思っています。



「ファラデーホール」(1978)。アクティブ・ストリングと鋳鋼引張リングによる張弦梁(BSS)第一号。



「世界建築家会議」(2011)の大会場を飾ったAND展の模型群(150点)とA-Dome(テンセグリティ)。

ー最後に、A-Forumの活動の主題である「アーキニアリング・デザイン(AND)」をご紹介します。

建築学会の会長になった時に、学会で何かしたいと言う思いがありました。学会は学術と技術の相互切磋琢磨の場で、学術と技術は集まるけれど、芸術は無いように見えたわけです。学会の大会には1万人位集まる中で、構造や設備、環境、歴史研究の人は参加しますが、建築デザイン系の人は参加しません。建築界を引っ張って行くのはデザインだから、「デザイン」と言う言葉が学会に無いのはおかしいと、学会長になった時に思いました。

そこで、ぼくが掲げた最初のテーマは「建築学とデザイン力の融合」で、その根本理念が「アーキニアリング・デザイン(AND)」です。エンジニアリング・デザインとアーキテクチャー・デザインは、本来一緒になくてはならない。学会もデザインが引っ張って行く事で、世の中で初めて学会が認められるのだから、もうちょっとデザインを中心にやりましょうと提唱しました。

最初の理事会で、「アーキニアリング・デザイン」を提案しましたが、理事の誰からも賛成されませんでしたね。何度か理事会を重ねてやっと認めてもらい、今も続いている「アーキニアリング・デザイン展」や「建築デザイン発表会」がスタートした。デザイン系の人たちが発表する場が学会内に出来たんですよ。

デザインと言うのは、「意匠」とか英語の「デ



「出雲ドーム」(1992)。直径150m、高さ50m。32本の大断面集成材による張弦立体アーチはプッシュアップ工法で一気に立ち上がった。



A-Forumにおける座談会風景。建築家の内藤廣、大西麻貴と共に。

ザイン」の意味を超えて、大きく「統合」の意味で使わないといけない。ぼくは構造デザイナーとしては、構造的な専門的視野を持ちながら、建築や物事を「統合」していくことに力を尽くしたいと思っています。

アーキニアリング・デザインは古くて新しい言葉です。2つのベクトルで表現され、一つはやりたいことを目指すImageの「I」で、もう一つは、実現のためのTechnologyの「T」です。普通ならイメージして、実現するテクノロジーに向かう一方通行になりますが、そうではなくて、テクノロジーが持っている素材や仕組み等の様々のことをデザインに反映させてデザインを刺激する。お互いに行ったり来たりすることを「双対ベクトル」と言ってますが、これがアーキニアリング・デザインです。

「I」はアーキテクトで、「T」はエンジニアで、二人が心して上手くやれば良かったのだが、最近のもう一つ「IT」と言う第3者が入って来て、この2つのベクトルの中に「IT」をどう入れていくかを考える必要が出て来た。今までは「I」と「T」の二つ巴だったが、これからは「IT」も加わって三つ巴になっていく。この話は今のところまだ混沌としているので、これからの議論ですね。「アーキニアリング・デザイン」や、A-Forumでの活動の主題になりそうです。

聞き手 徳岡浩二 田鍋稔  
松下典央 村上栄二

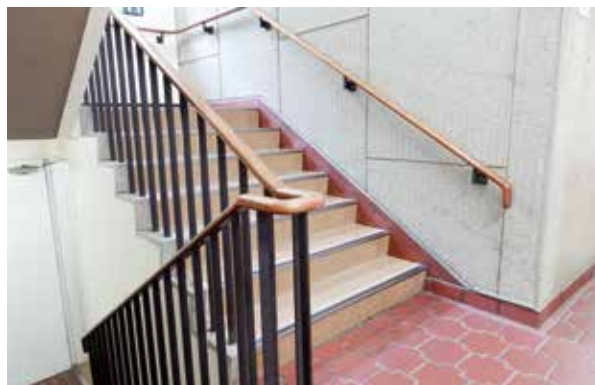
# 前川國男が遺した最後の庁舎建築の今

横浜市中区役所 一九八三年

文・写真＝松隈 洋〔神奈川県建築学芸部教授〕



南西側から見る庁舎正面外観



一階の事務用階段と木製の手すり

これも奇遇の縁なのかもしれない。私事ながら、二〇二三年三月に京都工芸繊維大学を停年退職したが、四月から神奈川県建築学芸部に着任し、五年間の短い期間ではあるけれど、研究教育の現場に立ち続ける機会を得た。そして、二年目となるこの春学期は、約三〇人のクラスで新入生向けのガイダンス講義を担当することになる。

その中で、横浜の近現代建築をめぐる現地見学の候補の中から迷わず選んだのが、JR根岸線の関内駅のほど近くに一九八三年に竣工した横浜市中区役所である。歴史を振り返れば、七八歳を迎えた前川國男が最晩年に手がけた最後の庁舎建築になる。けれども、竣工時に雑誌には発表されず、人知れず静かに時を重ねて来た建物だった。実は、一九八〇年四月に事務所に入所した筆者は、翌一九八一年に設計チームに加わり、右も左もわからない未熟者のまま、この建物の平面と立面の検討図や階段とトイレまわりの詳細

細図を四苦八苦して描いていたのだ。感慨深いことに、それから四〇年の時を経て、若い学生たちを案内する役回りが増えてきたのである。そこで、ここでは、この建物の拙い設計経験と、今ならわかる、ここで試みられた設計方法の歴史的な意味について、書き留めておきたい。

前川事務所に入所した一九八〇年当時の所員は三〇数名であり、複数のプロジェクトが同時進行する中で、新入所員は、その間を渡り歩き、さまざまな図面を担当して設計の実務経験を積んでいく、という修業方法が取られていた。入所して最初に取り組んだのが国立音楽大学講堂（一九八三年）の指名コンペ案の作成であり、戦前からの長老所員の大澤三郎（一九一〇～一九九九年）と組む形で小ホールを担当する。当然ながら、丁稚奉公の小僧に過ぎなかった。続いて、直前の指名コンペで当選し、実施設計が進んでいた熊本県立劇場（一九八二年）では、立面の検討図を担当する。

しかし、複雑な客席の断面構成を理解するのが精一杯で、立面を決める手がかりを見つけれないまま、描いた立面図は採用されずに終わってしまう。実際には、始めからあてにされてはおらず、建築の空間構成と構造図を理解させるための修業のひとつだったのだらう。そして、次に放り込まれたのが、横浜市中区役所の設計チームである。チーフの永田包昭（一九二八～二〇二四年）と中堅の島義人（一九四五～二〇〇九年）の下で進められた基本設計では、一階平面図や立面図の検討図を描き、実施設計に入ると、各階をつなぐ事務用階段とエレヴェーター、

トイレからなるコア部分の縮尺一／五〇の詳細図を担当する。しかし、学生時代と変わらぬに、設計資料集成を見ながら、描いたこともないトイレや階段の設計をどうやって検討すれば良いのか、白紙のトレーシング・ペーパーを前に途方に暮れるばかりだった。そんな様子を見かねたのだろう。突然、永田に事務所のトイレに連れていかれ、目の前の洗面器の設置間隔が人間の身体寸法から割り出されている、という当たり前のことを、身をもって体感させられる。そして、階段については、「敷地のすぐ近くに村野藤吾の横浜市庁舎（一九五九年）が建っているから、その事務用階段を実測して来い」と命じたのだ。

この実測で得たことは大きかった。簡素な裏方の事務用階段だが、上りやすい寸法と握りやすい木製の手すり、階段各部の納まりのディテールなど、村野の細やかな設計の真髄に触れたからだ。こうして、自らが担当した階段は、この村野の階段に倣う形で何とか図面化することができた。そして、ありがたいことに、今もその階段と木製の手すりは健在であり、今回、若い学生たちに、以上のようなエピソードを交えて語り伝えることができたのである。

開口部の連続ではなく、コールドレン鋼の骨太な花かごをランダムに配置してまで立面に変化を与えようとするのか、ほとんど理解できてはいなかった。今思い返せば、それらの工夫こそ、横浜市庁舎で村野が実現させた方法に敬意を払いつつも、隣接する暗褐色のスクラッチ・タイルに覆われた様式建築との調和を含めて、前川事務所が積み上げて来た構法の新たな展開として試みようとしたものであることがわかる。また、水平線を強調した彫りの深い表情を生み出す外壁のプレキャスト・コンクリート版のディテールは、永田が担当した東京上野の国立西洋美術館新館（一九七九年）の改良型として開発されたものに違いない。

最晩年の前川が外壁と開口部のディテールにこだわりの、そこに人に語りかけるような表情を与えようとしていたことを考え合わせると、このSRC造、地下二階、地上八階、延床面積約九千五百五十㎡の横浜市中区役所は、岡山県庁舎（一九五七年）、弘前市庁舎（一九五八年）、世田谷区役所（一九六〇年）といった一連のコンクリート打放しの柱と梁の構造体による明快な構成表現とは異なり、重厚な質感を獲得した庁舎建築の到達点と呼べるものだと思う。モノが増えて手狭になったからなのだろう。戸棚類が置かれて、吹き抜けの一階ロビー正面に施された元永定正（一九二二～二〇一一年）による壁画もどこか窮屈そうではあるものの、竣工から四十一年、時間の流れの中で、たしか存在感を保ち続けるその姿が、これからも市民のよりどころであってほしい。

# 水まわりを、 解放せよ。

決まった形、場所、色。  
水まわりはいつからか、  
こうでなければならない。という  
先入観に支配されていました。  
しかし、家具や音楽を選ぶように、  
水まわりだってもっと自由でいい。  
大切なのは、人と水とのよりよい関係。  
SANEIは水まわりを既成概念から解放し、  
もっと心地よい水との暮らしを、  
あなたと共に考え実現していきます。

ALWAYS WITH JOY  
SANEI





すべてのフロアがつながるワンルームオフィス



東側上空からの夕景